

### <書評>牧野英二『増補・和辻哲郎の書き込み を見よ! : 和辻倫理学の今日的意義』

伊藤, 直樹 / ITO, Naoki

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(号 / Number)

7

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007933>

【書評】

牧野英二『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ！』 和辻倫理学の今日的意義』法政大学出版社 二〇一〇年

## 和辻哲郎の書き込みを見よ！

伊藤直樹

本書は、法政大学図書館の主催によって二〇〇九年に実施された、「第一回法政ミュージアム企画展示」〈和辻哲郎の書き込みを見よ！ 和辻倫理学の今日的意義〉のさいに配布された「解説・図録」の増補版である。

法政大学にある和辻文庫は、総長も務め、和辻とも親しかった谷川徹三の尽力によって、和辻夫人照より寄贈されたものである。およそ五八〇〇冊弱からなるこの文庫に収められた和辻の蔵書には、和辻自身による多くの書き込みが施されていることが知られている。評者自身、故濱田義文先生を代表として行なわれたマイクロフィッシュ化の作業を手伝ったおり、和辻の書き込みを初めて見たが、そのときの驚きは、いまでも新鮮である。

蔵書への書き込みが、それほど注目されるのは、和辻が自らの蔵書を、いわばノートのように扱っているからで

ある。牧野氏が本書で、この書き込みを「彼（和辻）自身の思想形成の生き生きした記録や証拠」であると述べているが、それはけっして誇張ではない。和辻が原稿用紙に連ねる丸つこい字（姫路文学館で見たことがある）の、小さなものがページの余白に几帳面に書き込まれ、また○、◎、⊗、△、✓、？、∥などの記号が記されているのを見ると、思索というものの現場が立ち現れてくるのである。和辻文庫のうち、ほぼ全ページにわたって書き込みのある「重要度A」にカテゴリーズされる書物は、和書、洋書あわせて八二冊ほどある。

本書では図版として次の書物が取り上げられている。

○オスカー・ワイルド著『ドリアン・グレイの肖像』

（英文原書）

- H・コーヘン著『純粹認識の論理学』(独文原書)
- 藤岡蔵六訳述『コーヘン 純粹認識の倫理学』
- マルクス『資本論』第一卷(独文原書)
- マルクスおよびエンゲルス著『フオイエルバツハ論』  
(佐野文夫訳)
- 河上肇『近世經濟思想史論』
- 木村泰賢『原始仏教思想論』
- 宇井伯寿『印度哲学研究』第二
- 『國譯大藏經』第一卷
- デイルタイ『精神科学序説』(独文原書)
- イェーガー『アリストテレス:その發展史の基礎づけ』  
(独文原書)
- カント『実践理性批判』(独文原書)
- ヘーゲル『法の哲学』(独文原書)
- ヘルダー選集第四卷『人類史哲学考』(独文原書)
- 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』  
——貴族文学の時代』
- 武内義雄『論語の研究』
- 若月保治『古浄瑠璃の研究』第一卷
- 森蘊『桂離宮の研究』
- レオ・フロベニウス『アフリカの文化史』(独文原書)
- W・ヴント『民族心理学』第一〇卷(独文原書)

ここで取り上げられた、いわゆる書き込み本は、すべてが「重要度A」に属するわけではない。じつは、この取り上げ方には牧野氏のある意図が込められている。それについて述べる前に、本書で取り上げられているもうひとつの断簡のたぐいについてもふれておこう。和辻文庫のマイクロフィッシュ化にさいしては、頁のあいだに挟み込まれていたメモ、そして手紙のたぐいも見いだされた。岩波版の和辻哲郎全集には依然として遺漏があるが、ことに、本文庫のなかから見いだされた断簡類は、全集には収録されていない。本書では次のものが取り上げられている。

- 河上論争と関連のある「京都府川端警察署高等係」名による「京大事件発表に関する意見」を求める要請書
- ジョルジュ・ボノー(Georges Bonneau)の『日本民族の感受性』の謹呈時に送られたと思われる書状
- ハンス・シュヴァルベ(Hans Schwabe)による『日本精神史研究』のドイツ語訳を申し出た、和辻宛のドイツ語書簡
- フリートリヒ・ヨーデル著『倫理学史』第一卷挿入メモ
- カッシーラー版『カント全集』挿入メモ

さて、これらの書き込みや断簡によって浮き彫りにされ

るものは、いったいなにか。まず言えるのは、和辻と他の思想との、あるいは同時代の哲学者・思想家・研究者との対話や論争である。牧野氏が前掲の書き込み本を示しつつ、取り上げている論争には次のようなものがある。藤岡蔵六によるコーヘンの『純粹認識の論理学』の訳述の公刊に関して生じた「藤岡蔵六事件」。右傾化する大正末期にあって、マルクス主義経済学者河上肇とのあいだに生じた論争。和辻の『原始仏教の実践哲学』による学位授与に関連して、宇井伯寿と木村泰賢らとのあいだで生じた論争。津田左右吉と和辻のあいだに生じていた論争的な関係。また晩年の『桂離宮』の刊行のさい森蘊から向けられた批判。これらの論争ないしは論争的な関係の背後には、当然のことながら和辻自身の研究がある。本書で取り上げられている書物の書き込みは、この研究の跡を如実に示している。

さらに、本書で取り上げられているディルタイ、カント、ヘーゲルなどの古典テキストとの、和辻の対話も指摘できよう。ヘーゲルに関してはすでに、書き込みをもとになされた政治思想史を専門とされるの関口すみ子氏の研究がある(『国民道徳とジェンダー』)。これを哲学の側からとらえるところのようになるのか。また、お手盛りになるが、ディルタイ研究にたずさわっている評者の目からすると、和辻がとりあげているディルタイの著作に対する書き込みは、瞠目すべきものであり、論点の宝庫である。

このように和辻の書き込みは哲学者や同時代の研究者との論争・対話を示しているが、さらに「断簡」はまた別のことを示している。とくに、ジュールジュ・ボノー、ハンス・シュヴァルベといった人物からの手紙である。このフランス人、ドイツ人の二人は、ともに日本研究者であり、ことにシュヴァルベによって、実際に、『日本精神史研究』がドイツ語訳されていたならばと、「あり得たこと」を考えてみると興味深い。

しかし、和辻の書き込みは、けっしてこれだけにはとどまらないのである。それは、牧野氏が言うように、「和辻や彼の読んだテキストとそれらが生み出された時代や社会状況などの歴史的・社会的コンテキストを新たに「解説」し「解釈」すること」(本書12頁)につながってゆくからである。牧野氏は、これを、和辻研究の名著、湯浅泰雄『和辻哲郎』に仮託しつつ、「運命」と呼んでいる。右に上げたように、和辻はいくつかの論争を起こし、あるいは巻き込まれた。それは、藤岡蔵六事件がそうだったように、和辻自身の「カンシヤク」ゆえかもしれない。しかしそれだけではない。インド学の大家である宇井と木村の論争の発端が和辻にあったのは、和辻の学問的態度が、当時のアカデミズムの閉鎖性に抵触する学際的なものをもっていただけだった。また、河上肇との論争を引き起こしたものにせよ、また戦後に天皇制を擁護させたものにせよ、和辻の学問が、

「政治」的なものにズレ込まざるをえなかったからである。あるいは、ある論者の評を借りれば、それは和辻が自らの時代にあつて、「アカデミズムとナショナルリズムのはさま撃ち」の道を歩もうとしたからである。これはまさしく運命であつた。

しかしさらに、わたしたちはもう一歩先に進まなければならぬ。というのも、その運命が、和辻のものであることはそのとおりでしても、それが同時にわたしたちの運命であるかもしれないからである。牧野氏がそこで付け加えるのが、「グローバル化時代の思想」としての和辻像である。たしかに和辻にはそう呼んでさし支えない側面をもっている。本書で取り上げられている書き込み本の図録が示しているように、『風土』に見られるヘルダー的な多元的な歴史観、あるいは『倫理学』でのマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』やフロベニウス『アフリカの文化史』などについての関心である。いずれも、ヨーロッパ中心主義的な考え方から距離を置いたものである。しかしここには、牧野氏が指摘するように二つの問題が、言い換えれば、わたしたちが、和辻の運命を、わたしたちの運命に重ね合わせるために引き受けねばならない二つの問題が指摘できる。そのひとつは、和辻が有していた、同時代的にも類を見ない、先進的な、反ヨーロッパ中心主義的な視座が、残

念なことに「自文化中心主義」へと反転してしまうという点である。『風土』での「シナ」についての記述に端的に見られるように、東アジア全体への目配りはなく、むしろそれは、日本の「世界的使命」の称場につながってゆく。またふたつめとして、「和辻が生涯取り組んだ個人と人間相互の生きる場としての共同体との関係をめぐる議論」（本書47頁）は、「地域や共同体の存在意義が不可視となり、とりわけ人間の生活のよりどころである家庭や地域の崩壊が顕著な現象となっている今日」では、あらためて問い直されなければならない。

では、そこでわたしたちはなにをなすべきか。答えは、いささか月並みである。「和辻の書き込みを見よ！」と。ただし忘れてはならないのは、和辻自身も陥ってしまったように、その学問的営為が、政治的な状況に引きずられ、学としての自律性を喪失してしまうことを絶えず自戒しつつである。